

はじめに

恵迪寮の同窓と言っても、その時代も場所も様々で、私は北 18 条の第 2 農場のはずれにあった、2 代目恵迪寮の寮生でした。これが、札幌農学校寄宿舎以来の、どういう伝統をうけ継いできたのか、自分はそこでどのように鍛えられたのか、いろいろ考えているうちに、これは矢張り「寮史」をきちんと読み返してみる必要があると思って、年表を作って読んでみました。すぐに眼精疲労になりますので大変でしたが、その成果の一端を紹介します。

まず私の手作りの年表ですが、永年のしきたりとして形式的に受け継がれてきた「伝統」ではなくて、寮生として心に刻むべき大切な事柄がどのようにとらえられ、その志が「伝統」という形になってどのように継承されてきたかという点に注目しますと、すべてはクラーク先生の頃の時代につながっていきます。

その中で最も注目されるのが、札幌農学校が開校される時に、その学生が守るべき規則、規律について、事務方が事細かく取り決めようとしていたところ、クラーク先生はただ一と言、**be gentleman!** このことあるのみ、と言いつつというエピソードで、寮に関係のある人なら恐らく誰でも知っている、いささか誇らしい言葉です。つまり、他人から事細かく、あれ、これ言われて他律的に行動するのではなく、紳士らしい自律心を持って、自律・自尊で、自由に生活し、行動すべし、という趣旨でとらえられてきました。これは、我々の学校は規則づくめで学生をしぼらず、自由・自律で、のびのびと勉強できる場所なんだ、という当時の北大生のプライドにもつながっていたと思います。

しかし、私はこの一と言が、エスカレートして、独り歩きをする傾向を持っていたことを指摘しておきたいと思います。第一、誰でも彼でも、学校の入試に合格して、寮に入った途端に「紳士」になれ、紳士として処遇するぞ、と言われても本当に大丈夫だったのだろうか、という疑問です。そこで、クラーク先生がどういう流れの中で、どういうやり取りを重ねたあとで、あの言葉が出たかを考えてみますと、芝・増上寺の開拓使仮学校のがい経験、それをどう克服すべきかという、東京から小樽に向かう玄武丸の船中での、黒田清隆次官とクラーク先生との論議、その結末としての札幌農学校における徳育のあり方、聖書の導入、といった一連の流れを、よくかみしめて考えることが必要です。そして、クラーク自身も禁酒・禁煙を実践し、さながらピューリタンのような厳格な徳育教育で人格を陶冶する方向を導いたのでした。寮が禁酒であったのは当然のことです。

こういう、気迫に満ちた教育の場としての、札幌農学校は、全国から集まった若者達の向上心、向学心に火をつけ、それ以来、幾度かの存廃の危機を乗り越えて、やがて北海道帝国大学になっていく。その中核に寄宿舎以来の人格形成、人材育成の流れがあり、良きにつけ悪しきにつけてここに独特の人脈と学風が形成されていったということが

できます。そこで、今日は、全体を3つに分けて、1つは「恵迪寮史」を通読して、どういことが注目されるか、特に感心したのはどういう点か、2つ目は、その「寮史」に出てきた人物の中で、卒業後の身の振り方も含めて、恵迪寮が生んだ「代表的な寮生」と言えるような人物は誰か、それを思いつくまま選んで、少々詳しく調べた結果をまとめて、わが寮はこういう素晴らしい人間を作ったのだ、ということを確認してみたい。こういう人間を社会に送り出したという意味で、われわれはこれからの寮にどういう期待を抱くことが出来るか、を考える手掛かりとしたいわけです。そして3つ目は、このような寮生の成長過程を辿ってみると、それを取り巻く先輩や先生方の、目を見張るような指導と温情が随所に見られるのですが、その代表的な側面をまとめて考えてみたいと思います。これも善し悪しを超えて、こういう人生の出会いの中に我々は居たことを確認したいと思うわけです。

1. 寮史を通読して

実際に、第二次大戦後の、いささか混乱した状況で寮生活を送った者としては意外なほどわが恵迪寮は、学生寮として仲々きちんとしたルールの下に、学生らしい生活を支えるために寮生が懸命に努力してきた寄宿舎であったと思います。

当初は、学校の管理、監督の下に運営されますが、農学校の存廃の危機にさらされる頃、つまり開校後10年ないし20年位たった時期には、舎則や規則が出来上って、危機にある学校を何とか盛り立てようという学生側、寮生側の意欲が如実に示されるようになっていきます。中でも注目されるのは、1899年の「寄宿舎規約」で、その頃までに形成された慣習の内、悪弊と見られるものを防止することに重点をおいて、すべて舎生はどうすべきか、という観点からの条項が作られています。つまり舎生は、舎内の秩序を保ち、公益（皆の利益）を保つために、いかに行動し、これに違反するものには寄宿舎会議で決議して退舎を求めるとするという徹底した自治制をとっています。さらに日露戦争直前の時期に改正制定された「札幌農学校寄宿舎々則」では、寄宿舎の「綱領」として次の4点を列挙し、寄宿生の行動規範としています。すなわち綱領は、

- (1) 淳朴ノ風ヲ存シ剛毅ノ徳ヲ養フベキ事
- (2) 友愛ノ情ヲ篤クシ切思ノ実ヲ尽スベキ事
- (3) 礼儀ヲ尚ヒ規律ヲ守ルベキ事
- (4) 摂生ヲ重シ清潔ニ務ムベキ事

これをうけて寄宿生規約の第1条では

寄宿生は学風の發揮者であると共に、その擁護者としての責任を自覚して、上記綱領に従って実績を挙げるべきであるということです。こういう雰囲気からも当時の世相

の昂揚と、寮の存在、寮生の行動が、大学全体を代表し、リードするものなのだという熱気が感じられます。

こういう中で、校舎の移転、恵迪寮の誕生、都ぞ弥生の誕生、さらには北海道大学の開設というピークが形成されました。もちろん、物事には光の面もあれば、影の面もありますから、断定的には申しませんが、とくに表1を見ながら、大正から昭和にかけての時期に、全国的に旧制高等学校が出来て、何でも彼でも学校当局の言いなりになるわけにはいかないという訳で、寮の自治、さらには次第に乱れていく世の風潮を厳しく批判する、当時の知的エリートの卵たちの、世を憂い、世を批判する傾向を強めていっていた訳ですが、この流れに比べると、わが寮は、豊かな自然に育まれていたせいもあってか、はるかに大らかに、個性的に、寮生活を築いてきたように思います。

それは次の3つ、1つはクラーク以来の開識社を継続して、各自の辨論の術を錬えると共に、能動的な知的欲求を刺戟するという優れた伝統を継続したこと、2つ目は寮生相互の親睦・懇親の実をあげるために年中、随時懇親会、晩餐会を開いてきたという伝統、そして3つ目は、折あるごとに学校の元老、長老ともいべき先輩を寮に招いて、訓話を聞くという、誠に得難い伝統が続けられ、札幌農学校以来の諸先輩も招待に応じて、折あるごとに寮に足を運ばれ、寮生と膝を交えて語り合うという誠実に、誇るべき伝統が築かれてきたという点、があげられます。このようなすぐれた伝統を築いた寮は、全国の旧制高等学校の寮の中には一つもありません。私は、これらの点で、わが寮は、学生寮のあるべき模範となるような形を築いてくれたと思います。

しかし、プラスがあればマイナスもあるというのが世の常ですから、その面にもふれなければなりません。大正から昭和にかけての時期、つまり開寮20周年、本学創基50周年を迎える頃になると、寮の評判が学校の中でも、街の方からも、すこぶる悪くなったという記録が出てきます。北大が帝国大学として着々と拡充され、寮も予科生の寮となって、全学の学風の発信源になるという意気込みが燃えたのは誠に結構なのですが、その反面で、学校との協調を欠く傾向が次第につのり、酒を飲んで騒ぐ、ストームをやって暴れ回るのは、皆、寮生だ、という風評がつのって行った訳です。

これまでも、ごく一部の心得違いの寮生が困った事件、不名誉な事件、を起こしたことは、この年表にも出ていますが、世の批判は弊衣破帽のバンカラスタイル、飲酒、そして乱暴狼藉の極みのような街頭ストーム、の3つに集中しました。

飲酒は、さきほどの寮の規約でもはっきりと禁酒が掲げられていますから、寮生は街に出て飲むわけで、門限に遅れて、錠前をこわして入ろうとして退寮になるという事件がありましたから、世の風潮に流された話だと思います。2代目恵迪寮の寮生申合規約でも禁酒が明記されていますから、大びらに寮の中で酒を飲むようになったのは、昭和10年頃から以降のことのようです。

もちろん、元気な若者が普通の服装で酒を飲んで歩いて、それほど目立たないと思いますが、もう一つ、目立つのは、当時の寮生のバンカラスタイルです。これは先にもふれましたが、明治 36 年の寄宿舎々則の第 1 条の綱領の第 1 項、「淳朴ノ風ヲ存シ、剛毅ノ徳ヲ養フベシ」というのが、チャラ、チャラしたハイカラな風をとらず、純朴、剛毅のスタイルを助長したと思われませんが、いわゆる弊衣破帽は旧制高校生に共通した姿で、かなり眼ざわりだったのだらうと思います。

そして 3 つ目の街中でところ選ばずストームを展開する、例えば四丁目十字街でストームをやるというのが、私の身にも覚えがありますが、そのハシリを探ってみますと、明治 30 年頃にストームの唄という形で登場していますから、バンカラスタイルとほぼ同時期に、存廢の危機を乗り越えて、日清・日露で勝利して 1 等国になったという世の風潮に便乗した姿の一端と言えるかもしれません。スキー片手のストームは、旧制予科が廢止になって閉校記念祭の時にスキーが全部燃やされましたから、それ以降は、どうなっているのでしょうか。

もちろんこれらは、静かに勉学に励むという方向とは全く逆ですから、寮生は勉強しないという一般的な酷評のもとにもなったと思います。

2. 「代表的恵迪寮生」列伝

ここで表 2 に移ります。内村鑑三の著作に「代表的日本人」というのがあるのはご存知の通りで、これに倣って「代表的」という言葉を使いましたが、『寮史』を通読して、この人は、その時代の寮生の生きざまを如実に示すような生活・行動・活動を行い、しかも卒業後も、彼の人生を貫く形で、この青年期に形成された人柄・活動パターンを見事に示している人を選びました。戦中・戦後、あるいは安保騒動期、などにも、何人かの候補者が念頭に浮かび上って来ますが、甚だ残念なことには、各人の卒業後の生き方や活動ぶりをフォローすることが十分にできていないので、この「列伝」は未完となっています。そこはどなたか、後続の人達の中にこういった面に関心のある人が出て来てくれれば、大いに期待したいと思っています。

(最初から、キレイに、筋道の通ったものにならなくても、逐次訂正、追加、修正で良いでしょう。)

まず、一番目に紹介したいのが、伊藤清蔵(キョゾウ)です。私が彼の名を初めて知ったのは、日本で農業経営学の教科書を最初に書いた著者が、この伊藤清蔵であったと判った時でした。何でも彼でも、駒場農学校の方が上のように言う当時の権威主義に対して、私が専攻してきた農業経営学分野では、わが札幌農学校の出身者が先鞭をつけていたことを知って、大変誇らしく思いました。その中身は、当時の「お百姓の経営学」

などという話ではなく、ドイツの大農場の経営学を下敷にした、いささか古めかしい話ですが、開拓初期の北海道農業の推進にとって大変有力な手掛りになるもので、札幌農学校なればこそ、という著作です。表2に彼の概歴を示しておきましたが、1900年、札幌農学校を卒業、数年後に盛岡高等農林専門学校（旧制）の教授となり、ドイツに留学、帰りにはドイツ人の奥さんを伴ってくるということで、彼の人生はさらに大きく展開しました。実は彼が寄宿舎時代の寮生の大先輩にあたることを私は『寮史』を読んで発見したわけですが、先ほどふれた1899年の寄宿舎規則の起草委員の筆頭に彼の名が登場しています。この寄宿舎規則は、「従来の習慣又は悪弊を熟知せる人々で、その弊を深く憂慮してこの挙に出たもの」という但し書きからも判るように、在来の悪しきシキタリを思いきって一掃しようとする意欲に燃えた画期的な活動であったことが読み取れますが、ここからも彼が、言うべきことはハッキリ言う、行動力、実行力に富んだ人物であったことがうかがわれます。

ところがその彼が、卒業後9年目に「これまでの研究成果の实地検証のため」という大義名分で、突如、アルゼンチンに渡って、7500町歩の大牧場を開きました。このことについて私はひそかに、当時の日本社会の閉鎖性（外国人ギライ）があったのでは、…と憶測していますが、調査不足で正確なところは判りません。ともあれ、この伊藤清蔵の転身ぶりは、あの「藻岩の緑」（明治44年寮歌）の4番の歌詞を彷彿とさせます。ご存知のように4番の歌詞は「雲より高きアンデスの裾野に友よ羊逐え天に漲るアマゾンの岸辺の森に斧を振れ」ですが、これを地で行くような活躍ぶりです。なお、この作詞者の松山茂助君（長野県出身）も、のちにサッポロビールの社長をはじめとする多彩な活躍をしている人物で、彼もまた、列伝の一頁を飾るにたる人と言えましょう。

ともあれ、彼の“富士農場”を訪ねた後輩は、伊藤がじかに、大変親切に農場の中を案内してくれたというレポートを残していますから、その研究成果は存分に発揮されていたと思います。66才で没。その後の農場の消息は不詳。

次に、農学校も校舎が北のキャンパスに移り、寄宿舎もいまの文系長屋のハズレに移って初代恵迪寮が出来てから5年後、坂村徹（テツ）という広島出身の若者が入寮しました。彼を列伝の二人目に挙げる理由は、寮生時代の活躍ぶりが、寮の伝統を積極的に支えるものであったこと、それは委員長に選ばれてその責をはたしたばかりでなく、クランク以来永く続けられてきた開識社の活動にも積極的に参加したことに示されています。この開識社というのは、文字通り **knowledge open** をさすと同時に、多くの聴衆の前で明晰な辯論を展開する訓練を目的として始まったわけですが、彼は第64回開識社（大正元年）で「遺伝性質の運搬者」というテーマで、植物遺伝学の最新の情報を報告しました。彼が東北帝大農科大学を卒業する1年前のことでしたが、その内容は、「近来、稀な大収穫」と呼ばれるほど大反響を呼んだと『寮史』に記録されています。

そして、この報告をたまたま聴いた木原均（彼は当時、もっぱら野球に没頭していて学問研究とはほとんど無縁と思われるような寮生活をしていたらしい）の知的好奇心に猛然と火をつけ、その後の大きな業績（小麦の染色体の研究で学士院恩賜賞に輝く成果を挙げた）のキッカケになったと本人が述懐するようなシロモノとなったのでした。

その後、坂村は昭和 5 年に創設された理学部に転じて、わが国の植物遺伝学の先駆的な研究を続け、学士院会員となり、理学部長を勤め、1976 年には文化功労者となり、1980 年、92 才で没しました。彼はどちらかといえば地味で、目立ちたがり屋の対極にあるような、存在感のある人柄で、しかし頼まれれば快くこれに応ずる気さくな側面をもちあわせていて、寮生以来、これを貫いた学究であったということが出来ましょう。

次に列伝の 3 人目として、横山芳介を取り上げます。その孫に当たる繁樹君が、私のゼミに所属した学生であったことや、その歌碑の建立の際に代表世話人となった渡辺侃先生（当時経済学部長）が農学部におられた時、私の卒論の指導教官であったことなど、いわく因縁、故事来歴は山ほどありますが、やはり私も北大の源流に触れる因縁を持っていたのだとつくづく思います。本題に戻って、横山芳介のことをこのように深く知ることが出来たのは、ひとえに、同窓の田嶋謙三、塩谷雄、大高全洋共著の『小作官・横山芳介の足跡』によるところが極めて大きいので、特記させていただきます。このように寮生の卒業後の人生行路が克明に明らかにされれば、列伝を考えることも、大いにはかどるに違いないと思います。

横山芳介は明治 24（1891）年、東京神田で生まれたチャキ、チャキの江戸っ子ですが、家は、おそろしく頑固で、しかも大酒のみの父親が万事、厳しくとりしきる、しかもこの父親は貴族院書記官という法科万能のゴンゲのような存在、という極めて特異な家庭に育ちました。一方、芳介は豊かな感受性を文筆にあらわす、いわゆる文才に非常に長けた少年として育ち、将来はこれを職業としたいという望みを本人は抱いていたわけですが、父親は頑としてこれに反対するという、極めて険悪な状況にありました。このような抑圧的な雰囲気の中で、中学卒業後も進学がうまくいかず、翌年、ようやく父との折れ合いがついて東北帝国大学農科大学予科を受験して、合格。父親からの厳しい抑圧から脱れて、当時ようやく 6 万人くらいの人口になっていた札幌にやってきました。

彼は恵迪寮に入って、直ちにその並々ならぬ文才が衆目に認められます。折から寮の文学系の同好組織の一つである「凍影社」が設立され（横山もその発起人の一人となる）、文学愛好者のグループに加わると同時に、恵迪寮の機関雑誌『辛夷（コブシ）』の編集委員の一人として選ばれました。つまり、新入早々の横山は、すぐに仲間達にその才を認められ、厳しい父親のカントクも無くなって、存分に翼を伸ばしはじめたわけです。

そして明治 45 (1912) 年 3 月 26 日、恵迪寮第 6 回目の寮歌が誕生しました。「都ぞ弥生」です。これを清書したあと、さらに第 3 節と第 4 節に手を加えたという草稿が、札幌「開拓の村」の恵迪寮（復元建築）に飾られているのは、ご存知の方も多いと思います。

しかし、良いことがあれば、まずいこともあるのは世の常で、この年の 7 月の学年末試験で、横山は落第、予科 2 年に留置されることになりました。彼は激しい失望と孤独の中に落ち込んでハンモンし、しばらくは札幌近郊の山野をさ迷う日々が続いたといわれていますが、実際は、間断無く雑用を処理しなければならぬ寮の委員にえらばれたため、そのような個人的なハンモンに浸っている暇など全く無くなってしまったというのが本当のところらしく、いかにも恵迪寮らしい解決の契機が与えられたというのが、ことの真相であった模様です。

さらにこの頃、彼は「遠友夜学校」のボランティアに参加（丁度、彼が尊敬してやまない有島武郎がその校長を勤めていた時期にあたるらしい）、貧しく、恵まれない境遇の子女を教える実に、ヒューマニスティックな活動に加わるという経験をしています。これは後述のような学校卒業後の人生行路にも非常に大きな影響を与えたと思われます。

もう一つは、学生時代の出来ごととして見逃すわけにはいかないエピソードがあります。それは、農学科の学生として、現地の実情をみるために富良野の北大第 8 農場を見学した時のことですが、丘陵の一隅に立って、その広々とした眺望に感動して、彼は思わず「なんとという広大なながめ！」と叫んだそうですが、そのすぐあとで、この広大な農地が、小作農の耕している土地であることを知って、彼はすっかり落胆して、モノも言わなくなってしまうほどのショックを受け、それ以降、「広大な農地」というような賛美の声は、彼の口から出ることはなかったというエピソードです。当時の北海道といえば開拓初期のフロンティアであるにも拘らず、古めかしい地主と小作農とのドロドロした関係が、早くも、この広大な農地に拮がっている、そのことをその時まで知らなかったということは、横山にとっては、全くショッキングなことだったに違いありません。これが、卒業後、静岡県の農会の技師として勤めることになった時、直ちにすることが、管内の町村をくまなく歩いて、現地調査をやったという行動につながっていると思います。小作というのは、経済的に困窮して自分の土地・田や畑を質に入れたり、売ったりして、その土地を今度は地主から借りて耕作する農家のことで、当然、地主に小作料を払わなければなりません。その小作料が非常に高く、生産高の 2 割、3 割を支払うというのが普通、それがいやなら、よそへどうぞ、と言われても、どこにも有利に土地を貸してくれる人などいない、泣く泣く、地主の言いなりでやっていかなければならない人達が、日本の農家の 6~7 割、日本の農地面積の半分近くに達していて、この窮状をどう解決するかが、日本農政の最大の課題で

した。小作調停法や自作農創設維持法などの改善策も、議会の地主勢力の反対で中々、順調には進まないというのが実情でした。

少々、回り道をしましたので長くなってしまいましたが、横山が静岡県農会の技師として登場した「舞台裏」はこのような状況だったわけです。しかし彼は、ここでもその優れた文才を生かして、農家を啓発するための雑誌に休みなく論説や記事を投稿し続け、その後の15年間に70数編が掲載されたと言います。さらに、新たに制定された小作調停法に基づいて設けられた「小作官」（全国で18人が設置されましたが、そのうちの一人）として選ばれて、対立する地主・小作のお互いに妥協できる線をさがして奔走するという、誠に厄介な任務につくことになりました。彼の日夜を問わぬ尽力の姿は、小作農の人達からは神さまのように慕われたと伝えられていますが、惜しくも肺結核の病魔に侵されて、46才の若さで没しました。このヒューマニスティックな活動ぶりこそ、彼の恵迪寮生時代からの一貫した生きざまであったといえましょう。

さて、そうこうしているうちに昭和に入って、表1の（その2）のように、北18条の2代目恵迪寮への移転、他方では満州事変、日中戦争、というキナ臭い時代に入っていきますが、代表的寮生列伝の方は、何人かの候補があがるものの、調査不足、データ不足で、中々しぼりきれないのが実情です。寮生活をめぐる雰囲気も、軍部による国家的戦時統制や、治安維持法に代表される思想統制が、コソクな形で入り込んで来て、当時の『寮史』を読んでも、チットも楽しくない日々が続きました。

さらに敗戦、そして物資不足、極端な食糧難の戦後期に入ると、さまざまな生活苦が寮生活にもしのび込んで、徳育の場としての色彩が急速に消えて、旧制から新制への大学改革もあって、大学大衆化の流れと、厚生施設としての学生寮の位置づけが強まっていきました。加えて、戦後の民主化教育推進の反映でしょうが、寮生の政治意識の、これまでにない高まりと多様化が進んで、安保反対、学園騒動の混乱期に入ると、これが一層激しくなり、戦前以来戦後も続いてきた寮生活を支える精神面の空洞化も進んで、寮のアパート化、寝室化などが指摘される状況が進行し、これに対処して、昭和28年からは寮のルールも「北海道大学恵迪寮規約」（こと細かに成文化された自治組織規約）へと画期的に変化していきました。したがって寮の名前は、以前と同じ恵迪寮ですが、大げさに言えばまるで別世界のような雰囲気を示す面もでてきました。

こういう激動の中で、「代表的な寮生」を選ぶことは、まさに至難のワザです。といって僅か三人を掲げるのみでは「列伝」の看板が、いささか寂しい、ということで、あえて候補を探し続けていたところ、つい一ヶ月ほど前に亡くなった太田原高昭君の名が浮かんできました。上述のように、戦前以来の寮の生活の伝統が大きく激動した

時期の候補というわけで、それを乗り越える記録やデータは必ずしも十分ではないのですが、列伝の四人目として彼に登場してもらうことにしました。

太田原は、1939（昭和14）年、福島県の会津若松で生まれ、地元の高校の新聞部で活躍して全国コンクールに優秀するといった成果をあげたそうですが、1959年、北大理類一番の成績で合格して話題になるほどの秀才で、恵迪寮には、半年遅れて10月に入寮（それまでは出身地の関係で県人寮・会津寮に在寮）しました。彼は社会の動きに対する鋭い関心、そして社会のものを帰納的に、手際よく整理していく思考パターンに優れていて、これが農学部の中の、社会科学系の分野に進んだ根底をなしていたと思われます。

彼は、いつも明るい笑顔で人に接し、まわりの人を引きこんで親しく語りあう雰囲気を作り出す、一見すれば限りなくアバウトに見えながらも、不思議にカンドコロを的確にとらえて、たえず判りやすく、面白い、絵解き風の語り口で、相手を引きこみ、夜を徹しても続けるダベリ好き、語り好きの、類まれなセンスの持ち主でしたが、これが前述のように戦後の大きな変革に直面していた寮生活の運営に当たっても役立ち、選ばれて委員長を担うことになっても、適切な対応を採って数々のムズカシイ局面（たとえば、警察からの容疑者の寮生の引き渡しを、寮として拒否する「籠城事件」など）を回避できたとみられます。そして大学卒業後も当時の話し仲間、語り仲間が相集い、毎年会合を続けるという、かなり珍しい流れが形作られていました。

彼は学部に進んでからは、全国で唯一の講座ということでも有名な「農業協同組合論」（いまは「協同組合学」分野となっているらしい）で多くの成果を挙げ、大小あわせて40冊以上に及ぶ専門著作を刊行し、教授、農学部長を歴任、さらに近年は、国論を二分する、例のTPP協定に対する反対運動や、政府・財界による「農協つぶし」改革に対抗して、敢然とこれに反対する運動の先頭に立って、国会審議の参考人として発言するばかりでなく、需めに応じて北海道内はもとよりのこと、全国各地の農村に足を運んで、その判りやすい、説得力に富む語り口で、農村地帯の実情から説き起こし、断固反対の根拠を明快に示すという、まさに大車輪の活躍ぶりを展開しておりましたが、その過労の累積もあってか、ついに77才で没しました。その熱血漢溢れんばかりの活躍ぶりは、彼の恵迪寮時代からの全く一貫した姿勢であったと思います。

さて、ここで3番目の項目に入ります。

3. 先輩・先達が注いだ温かいまなざし

ここで大きく話が前後するので恐縮ですが、クラーク先生が *be gentleman* の一言でたりると言い放ったという学校の規律に関して、是非とも指摘しておかなければならないことがあります。それは、明治9年の開校式の時に行われたクラーク教頭の訓示で

あります。いわく「酒・煙草及び食慾と情慾とを制せよ “control your appetite and passion”。又従順にして勤勉なれ。而して汝が学ぶ所の凡ての學術に向かつて出来る丈の智識と熟練とを得て、卒業後重要の地位を得よ。」その主眼とするところは人間としての徳育はキリスト教にまかせるが、決してそれにマル投げするわけではなくて、各人が自律、自制の努力をすれば、するほど、氣力が充実して“エナジーボーイ”となることが出来ると励ましているわけです。紳士になる道すじをこと細かく懇切に示しているともいえましょう。この、若者達を大いに励まし、彼らが元気に成長していくことをひたすら楽しみにするという気風も、札幌農学校の誇るべき伝統になりました。

それは、前述のように寮が折あるごとに学校の大先達ともいべき先輩を招いて、訓話を聞く習慣が形成され、継承されてきたわけですが、先輩の側も、こういう機会を楽しみにして、寮に足を運ぶしきたりが続けられました。例えばさきほどの年表の1905年、初代恵迪寮が出来た頃は、札幌農学校存廃の危機のさなかでありましたが、そのような多忙な時機にも拘わらず、佐藤校長が寮生一同に、新しい寮に移っての心構えを説いています。そのスピーチは誠に感動的で、『寮史』をそのまま引用すると「ドミトリーの起源より論じ来って、現今教育家の寄宿舎に対する意見を述べ、終に其の必要性を説かれ、舎生は家族的に相愛し相扶けて、専心一意勉学すべきこと及び規則は確守すべきこと等、微に入り細に亘って懇切を極めた」とのことでした。これは、先生が学生に対して話をしたというよりは、大先輩の長兄が、ずっと年下の弟に向って、優しく、温かいまなざしを注ぎながら、静かに話を聞かせたシーンのように映ります。

この伝統が、学長（総長）が交替した時には新旧二人を招いて、歓送迎の晩餐会を開く、しかもどの総長もこれを快く受けとめて寮に足を運ぶという、まさに本流中の本流なればこそ、しきたりにつながっていったのでした。ちなみに初代の佐藤昌介から、第6代の島善鄰まで一貫して寄宿舎出身でした。

このような寮の設置者の側に立つ人々の行動パターンは、私達の学生の頃まで続いた東北各県の県人が設立した学寮（例えば秋田寮とか、庄内寮といった施設、10～20人程度の小規模な下宿寮で、その後、老朽化や資金難で廃止されたものが多いようです。）でも、大切な郷党の子弟を教育するという熱い願いに、恵迪寮とも共通するところがあったのではないかと思います。しかしそれらは余りにも規模が小さすぎたという制約があったように思われます。

恵迪寮の話にもどって、もう一つ挙げておきたいのは、永年に亘って予科の教員を勤め、学生達の敬愛の的となり、北大出身の先生ではないけれども、非常に熱心に寮の運営などにも参画して、多大の功績を残された先生、例えば昭和初期の青葉萬六先生、戦中から戦後の混乱期に見事に対処された宇野親美先生、なども、上述の直系の先輩、先達の先生方に勝るとも劣らぬ影響を残して下さいましたが、折あるごとに招待される、これに応じて気さくに出席して下さいるメンバーでした。

このように寮生の生活ぶり、成長ぶりに多大の関心を注いで、あたかも、かなり年下

の弟のように優しく、温かく見守ってくれる人脈が持続されたことも、わが恵迪寮の稀有の、誇るべき伝統の一面を示しているように思います。そのエッセンスのような宇野先生の言葉が『寮史』第二巻にありますので、それを紹介して、私の拙いスピーチを終わりたいと思います。それは、戦時中の当局や軍部からの規制が極端に高まった挙句、敗戦を迎えた時の、半ば途方に暮れた寮生達をさとす言葉ですが、「ともすれば画一的になりがちであった従来寮生活であるが、ここで **be gentleman** の精神に立ち還って、いわゆる軍国的強制を脱皮して、おおらかな伸々とした寮を建設する必要がある。」という、敗戦後初の幹事会への要請でした。